



## 2019年の師走を迎え



仲嶺 真弓

2019年も師走を迎えました。1月はどんなことを思っていたのだろうと2018年度1月号つばさ子を見返してみました。(以下の文章は、2018年度1月号の抜粋)

「2019年は新天皇に皇位が継承され、元号も新しくなります。少し前は、大正・昭和・平成と3元号を生き抜いた祖父母を「すごいなあ」と感心していた自分が、昭和・平成・〇〇と同じ3元号の時代を生き抜くことになるとは…とあらためて実感しています。新しい元号の世はどんな年になっていくのだろうかと考えつつ、終戦後の平和を祈り続け、次の世代に紡いでいくのは私たち大人です。次の世代の子どもたちにどんな未来を手渡せるのか、今を生きるこの国を支えている働き手の私たちが真剣に考えていかなければならないとあらためて襟をただした新年の始まりです。」

あれから11か月が経ち、あらためて自分が書いたその言葉を胸に刻みます。保育料無償化の話は単純に家計の負担が軽くなったというだけのことではないこと…。世代間ギャップは家庭の問題だけでなく、働く職場にもあること…。子どもの成長を見守るといいつつ、どうしても転ばぬ杖を出してしまう大人の関わり方を考えていくこと…などなど。お金を出せばなんでも手に入るこの時代。四苦八苦して、考えたりしなくてもほしいものは簡単に手に入り、与えられることが当たり前と思いがちな今の時代。人が人として育つために必要なことがどこか置き去りにされているように思えてなりません。

先日、育む会主催の、笑福亭銀瓶さんの講演会で、銀瓶さんの幼少期から今に至るお話を聞きながら、いろいろ考えさせられました。銀瓶さんの話で、人はどこでどういう人と出会うかわからないこと。その時々でかけてもらった言葉も、その時はわからなかったり、受け入れられなかったりすることも、数年後に意味があることに気付くことがあることを感じました。そんな銀瓶さんの人生の一片を聞きながら、銀瓶さんが出会った人々のように、自分は何かできていたのだろうかと問い返す。できることには限りがあるけれど、一期一会の人との関りを大切にしていきたいと思います。



**カンガルーの会（つばさ保護者会）から  
1,140円の寄付金をいただきました。  
ありがとうございました。**